

6

実践研究報告 No.1720



茅葺きの補修を自らの手で行い、 地域システムとしての再生をめざす

実践研究テーマ：空家茅葺民家の地域資源化に向けたアクションリサーチ

6

実践研究報告No.1720

空家茅葺民家の地域資源化のに向けた アクションリサーチ

—新川田籠地区での「内ヶ原の家」プロジェクト—

九州大学大学院 教授/菊地 成朋

牛島 朗、天満 類子、赤田 心太

福岡県うきは市新川田籠地区には茅葺き民家が数多く残っているが、それらの多くは持続の困難に直面している。そのような茅葺きの空家を使って、素人による茅屋根の補修を試みる活動を行なった。

専門家に助言をもらいながら、茅葺きの道具づくり、茅材の調達、技術習得と実践、集落住民らとの茅葺きワークショップを実施し、その過程を記録することで、非専門家がどこまで茅葺き工事に参与できるのかを検証した。

それによって、かなりの作業を担える可能性が確認できたが、同時に想定していなかった課題も見出された。今後は、地区内での茅場再生にも取り組み、地域循環的な営みとして茅葺きが行われることを目指し、活動を続ける予定。

1.1 活動の背景と目的・意義

1. 背景と目的

本プロジェクトは、空家となった茅葺き民家を再生する試行を通じ、伝統民家の現代的な持続に向けた課題の抽出および地域居住者や技術者と研究者が連携した新たな体制の構築を目指すものである。茅葺き民家は、葺き替えという定期的な営みを前提とすることから、現代における持続には難しさがある。それらが立地する地域は過疎高齢化に直面している場合が多く、管理主体を失った空家が朽ちるのを待つような状況が見られる。

福岡県うきは市「新川田籠地区」には茅葺き民家が数多く残っており、2012年に重要伝統的建造物



写真1-1 <内ヶ原の家>
外観

群保存地区（以下、重伝建地区）に選定された。しかし、本プロジェクトの対象地となる内ヶ原集落（図1-1）は、新川田籠地区内にあって重伝建地区の線引きから外れた集落である。われわれは、2008,2009年にうきは市の依頼により重伝建の選定に向けての実地調査を担当したが注1)文1), 内ヶ原集落とはその時からの交流が続いており、地域づくり活動への協力や過疎高齢化の進む集落の将来を検

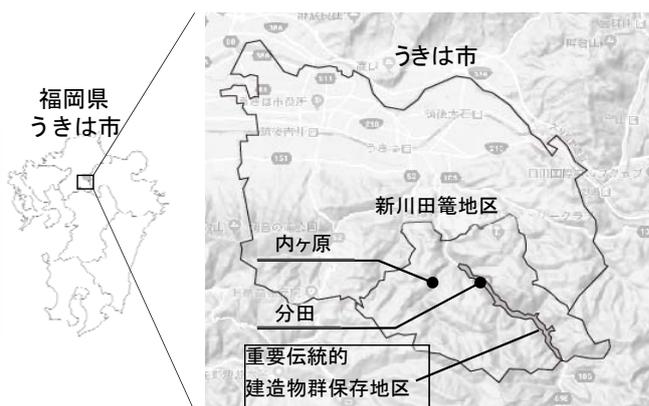


図1-1 プロジェクト対象地区

討する取り組みを行なってきた。

新川田籠地区の多くの茅葺き民家がトタンを被せられている中、内ヶ原集落には従来の茅葺きのままの民家が1棟残っている。この茅葺き民家は約40年間、空家の状態だったが、その間も所有者の家族が茅の葺き替えなどのメンテナンスを行なってきたため、比較的良好的な状態で保たれていた。しかし諸事情からそれも難しい状況となり、2016年には取り壊しが検討されていたので、われわれはその建物を借り受け、その活用と持続の道筋を探る企画を提案した。さいわい所有者の理解が得られ、取り壊しは延期となり始まったのが、この「内ヶ原の家」プロジェクトである。

今回の茅葺き屋根の自力修復を通して、現代における茅葺き民家維持の技術を検討するとともに、多額の資金や公的補助がなくとも伝統的民家が持続するあり方を模索した。

2. 活動の概要

対象とする建物は、建設が江戸期とされる茅葺き民家で、40年ほど前に空家となったが、その後も市内に住む子孫家族により維持管理され、茅葺き屋根に関して2002年に葺き替えが行われている(図2-1,2-2) 。その際に寄棟の4面のうち3面が葺き替えられたが、東側1面はそのまま手が加えられなかった。そのため、東面がかなり痛んだ状態となっており、今回はその部分を対象に自力による修復を試みることにした。

2017年9月より3回にわたって、当該地区も含め広く茅葺きを手がける三苫義久氏(奥日田美建)から茅葺きの専門技術を学んだ。同時に、今回の修理方法の選択についても専門家の助言をもらった。

それにより、茅葺きには職人が自ら作る専用の道具が必要で一般には市販されていないことがわかり、メンバーによる道具製作を行うことにした(9月~10月)。

11月から現場工事に着手し、足場の設置、老朽化状況の調査、補修方法の検討を12月にかけて行なった。並行して、茅等の屋根葺き資材の調達に努めた。その後、現地での試行を踏まえて工法を修正しながら工事を進めた。工法が確定した段階で、住民や一般市民が参加する茅葺きワークショップを開催することにした。事前に集落内外に広報を行なった。

2018年1月7日に開催したワークショップには、多数の参加を得た。作業終了後、内ヶ原公民館にて懇親会を催し、集落住民、地域外参加者、茅葺き職人らが茅葺きをめぐって懇談した。ワークショップ後も茅葺き補修工事を続けた。

2018年2月に今回の工事の完了に至った。

続いて、茅場再生プロジェクトに着手した。従来、茅葺きの茅はそれぞれの地域内で確保されており、入会地としての茅場が共同体によって運用されていた。戦後にその多くが消失し、近年では茅が専門業者によって生産され、売買される。それを再び地域内循環資源として生産し、茅葺き材料として使う営みの形成を目指そうというものである。

その試行として、耕作放棄地となっている旧棚田を借り受け、茅を育成することにした。まず、新川地区の候補地を検討・選定し、借用の許可を得た。また、茅の育成や生産についての情報収集や生産者へのヒアリングを行い、今回の方法とスケジュールを検討した。そのようにして実施計画はほぼ確定したが、屋根に使える茅が育つまでには長い年月を要する。現在はその準備段階にあり、年内の植付けワークショップ開催を目標に現地での作業を行なっている。

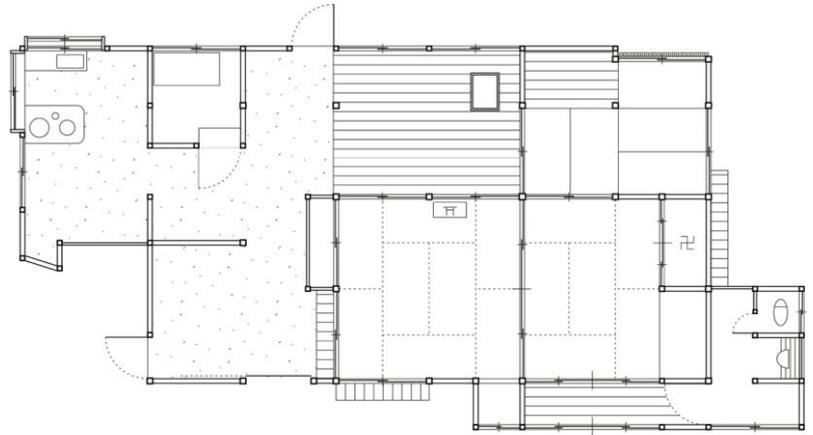


図2-1 <内ヶ原の家> 平面図

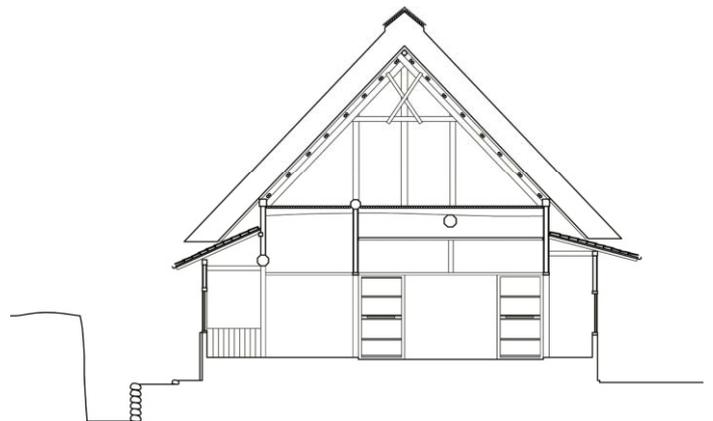


図2-2 <内ヶ原の家> 断面図

3. 茅葺き補修プロジェクト

3.1 破損状況の確認と補修方法の検討

まず、軸組について耐久性に問題があり長期使用には本格的な補強が必要であることがわかったため、今回の修復は、対症療法的な補修である「差し茅」を選択することにした。

次に、足場を組んだ段階で、この東面の素材が茅ではなく杉皮であることが判明した。林業が盛んだった当該地区では、昭和期を中心に杉皮葺きによる屋根面補強が普及している。茅にくらべ杉皮は耐久性に優れ、50年ほどの寿命がある。この民家も、当初は茅葺きだったものが、昭和期に全体が杉皮葺きとなったと考えられる。それが2002年の葺き替えによって3面が茅葺きとなり、東側が古い杉皮葺きのまま残されていたのである。

その杉皮が老朽化して脆い状態となっており、表面が凹み、部分的に「木コ竹」(茅を押さえつけて止める竹材)が露出していた(図3-1,3-2)。今回の補修では、傷みのひどい部分を補強し、薄くなった屋根材を充填し屋根厚を増やすことにした。

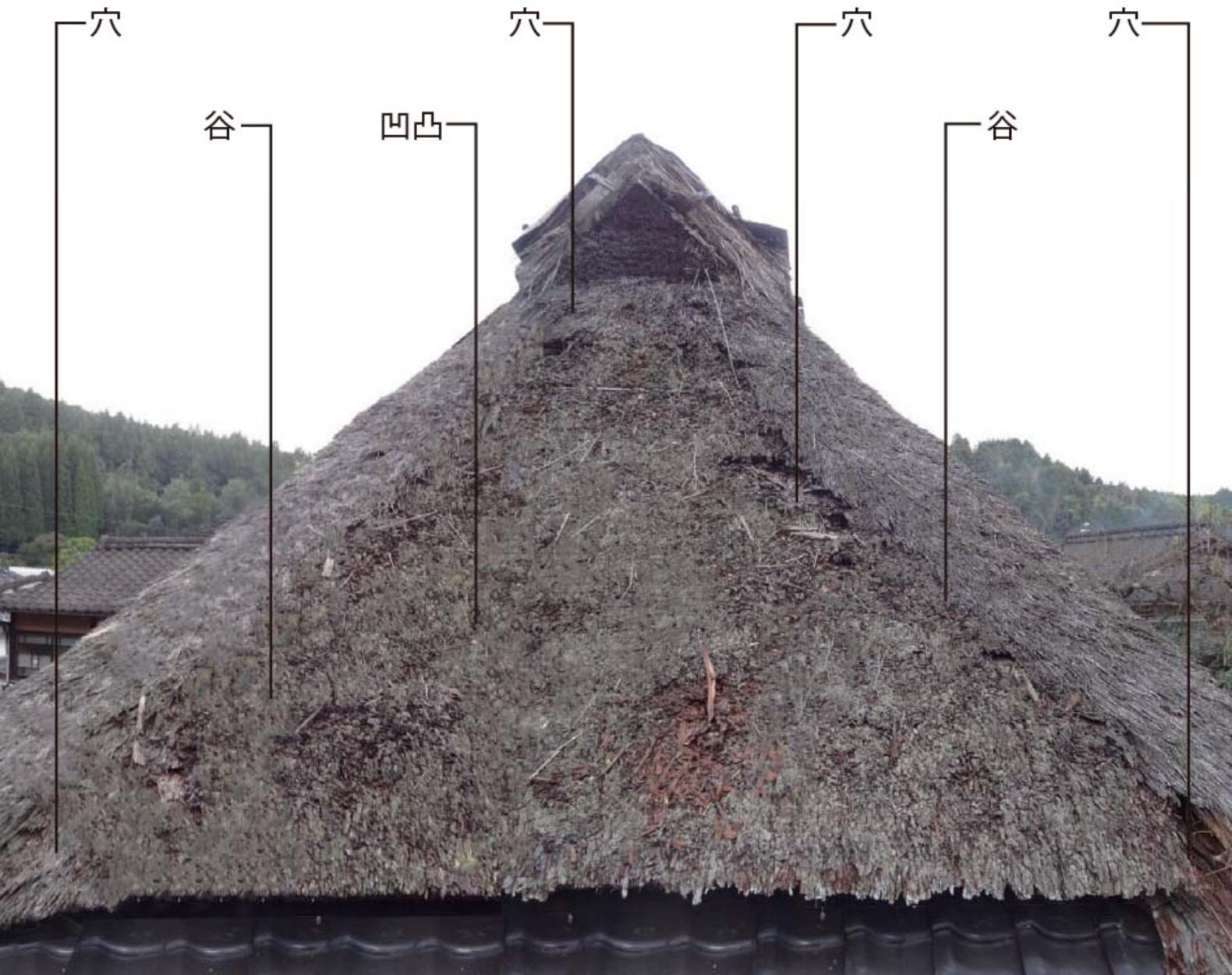


図3-1 修理前の東側妻面

工法は、素材に茅と杉皮を併用し、破損状況によって使う素材を選択する。屋根の厚みの確保には、杉皮の充填と「トラ葺き差し茅」を行う。「トラ葺き」は茅と杉皮を交互に層状に葺くもので、今回は差し茅を列状に行うことでトラ葺きの仕上がりとする。参加型ワークショップではこの「トラ葺き差し茅」の作業を行う。

3.2 道具の製作

まず、実測を行なった。茅の葺き替えに用いる道具は、大きくタタキ、ハサミ、ハリからなる。タタキは、葺いた後の茅を叩いて揃えるための道具で、使い方や形状によってホメイタ、ナガエ、リョウテツキなどの種類がある。ハサミは、仕上げの段階で茅を切り揃える際に用いる。屋根面に手が当たらないように柄と刃との間に角度がつけられている。また、軒と平面では刃渡りのちがうハサミを使うことが多い。ハリは、ホコ竹を固定するために縄を屋根の表から裏側に突き通す時などに使う。先端を尖がらせ、そこに穴をあけた形状をしている。その他に、茅葺き道具として、茅を引き抜くヤットコ、差し茅の際に隙間をつくるサジ、コジアケなども使って

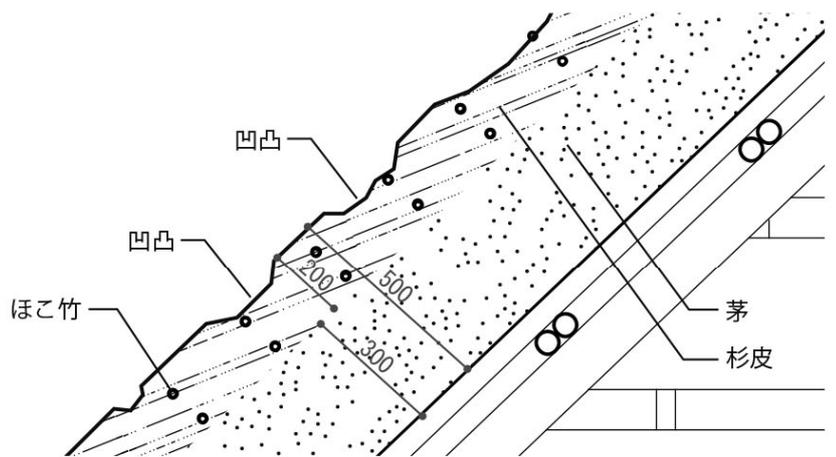


図3-2 東側妻面の断面

いる(図3-3)注3)。

それらのうち、今回はホメイタ・ナガエ・サジ・コジアケの4種類の道具を作ることにした(図3-4)。ホメイタとナガエは茅を叩いて均し形を整える道具で、ホメイタは平面、ナガエは主に軒先に用いられる。材料には、ホームセンターで杉材を購入して使った。ホメイタは、2枚の板材を貼り合わせ、電動丸鋸で表面に凹凸をつけ、角材を削って作った

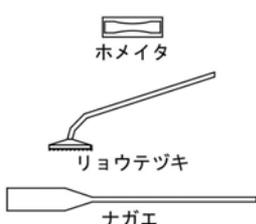
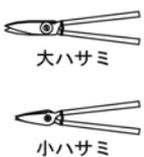
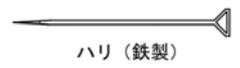
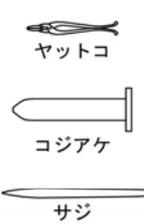
| | |
|---|--|
| <p>タタキ</p>  | <p>ハサミ</p>  |
| <p>ハリ</p>  | <p>その他</p>  |

図3-3 三苦氏の茅葺道具



図3-4 自作した茅葺道具

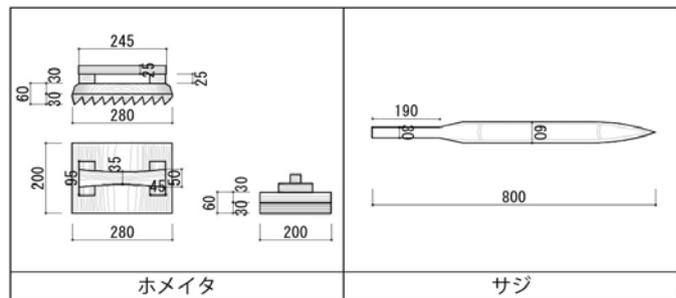


図3-5 製作用図面



図3-6 ホメイタの製作



図3-7 サジの製作

取っ手をビスとボンドで接合した(図3-5,3-6)。ナガエは、1本の角材を削り出して作った。サジは、孟宗竹を半分に割り、形を整え、ディスクグラインダーで先端を薄く削って作成した(図3-5,3-7)。コジアケは、板材を削って作り、それに角材の取っ手をつけた注4)。

その他、ハサミ・押切などの工具については、うきは市浮羽歴史民俗資料館が保管しているものをお借りした。

3.3 資材の調達

屋根材として使う茅は、佐賀県で屋根葺き用の芦の採集・販売を行なっている中尾貞弘氏から使わない中古の茅のストックが20束あるということで、無償で提供を受けた。

杉皮については、たまたま重伝建地区内で杉皮を外して茅葺きとする修理工事を行なっている物件があり、杉皮が廃材として大量に発生していた。施工者の植田龍雄氏(阿蘇茅葺き工房)に相談し、その中古杉皮を譲り受けることになった。

足場木に使う真竹は住民の協力により内ヶ原集落の竹林から切り出した。その他のものはホームセンターなどで購入して揃えた。

3.4 補修の施工

足場の設置(2017年11月):大学の技術職員の協力を得て一般的な工事現場で使用されるスチールパイプの足場を設置した(図3-8)。

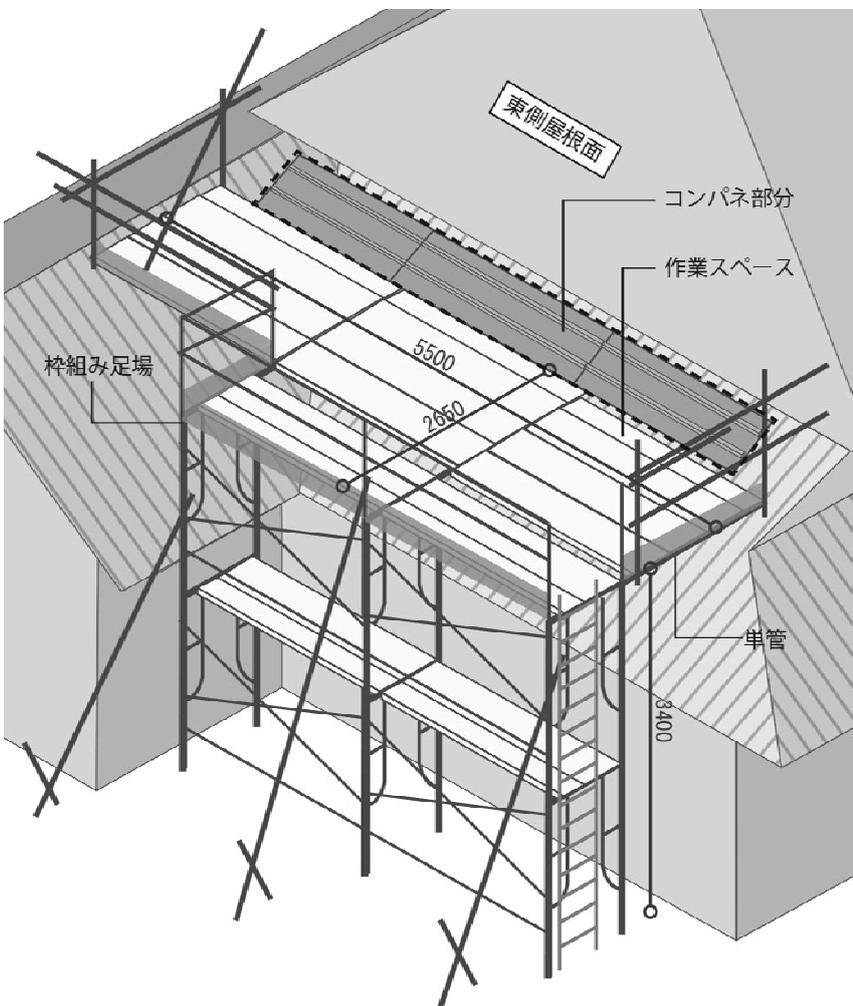


図3-8 足場の設置

現地での技術指導と試行（2017年12月～2018年1月）：足場設置後、三苫氏と上村淳氏（奥日田美建）より実地指導を受け、それをもとに試行錯誤で工事を行なったが、うまく施工することができなかった。そこで、2回目の指導では、具体的な改善点について助言をもらった。そして、その後には基本的な作業がある程度できるようになった。さらに3回目の指導では、凹凸を均す際のコツなどを教えてもらった。それによって仕上げの出来栄が格段に向上した。採用した工法は大きくトラ葺き差し茅、差し杉皮、穴塞ぎの3種類である。



図3-9 補修方法の検討

トラ葺き差し茅：茅と杉皮の混ぜ葺きである「トラ葺き」を参考にして、杉皮葺きに茅を列状に差す工法を考案し、実際に試してみた。これにより、茅を充填して屋根厚を回復させるとともに、見栄えとしても疎らに茅が差されるのに比べ有効である。その施工の手順を図3-10に示す。(1)茅の差し込みでは、作成したサジで杉皮を持ち上げ、押切で60cmにカットした茅を差し込む。その際、茅の根元を下に揃える。(2)叩き入れでは、作成したホメイタを用いて、差し込んだ茅を屋根の中のほうに叩き入れる。その際、角度を保つように茅を上から手で押さえながら叩く。(3)切り揃えでは、屋根表面にはみ出した茅を、ハサミを用いて切断し、屋根の面を揃えていく。(4)トラ柄の作成では、切り揃えた茅の上部の杉皮5cm程度の間隔をあけて、(1)～(3)の工程を繰り返すことにより、縞模様の屋根表面を作り出す。

差し杉皮：屋根厚を回復させる工法として、差し杉皮を試みた。これは、茅屋根に差し茅をするように、杉皮葺きに杉皮を差し込む方法である。その施工手順を図3-11に示す。(1)杉皮の引き出しでは、サジを用いて凹んでいる箇所の杉皮を持ち上げ、サジの下の杉皮を引き出す。(2)杉皮の差し込みでは、引き出した杉皮の下に新しい杉皮（今回は中古）を差し込む。その際、杉皮が短くなっている部分に重点的に差し込む。(3)叩き揃えでは、ホメイタを用いて、差し込んだ杉皮と引き出した杉皮を一緒に叩き入れ、表面を揃えていく。この作業を、東側全体をみて凹んでいる箇所に施し、厚みを回復させるとともに、屋根面の凹凸をなくすようにした。

穴塞ぎ：特に痛みが激しく穴が空いている箇所には、詰め物をして表面を塞ぐ施工を行なった（図3-12）。(1)ツメモノの設置では、穴が空いて露出したホコ竹の奥に、杉皮（劣化したもので構わない）を詰める。これは、仕上げとして並べる杉皮の勾配が緩まないようにするためである。(2)杉皮並べでは、下部から順に杉皮を並べる。その際、上下の隙間が重ならないように、互い違いに重ねていく。(3)ホメイタを用い、並べた杉皮を叩き揃える。この他、軒先や角の部分などの部分補修には茅を用いた。

工事の竣工（2018年2月）：ワークショップ後、補修工事を継続し、1月末をもって今回の補修工事は完了とした。さらに、2月初旬に足場を解体・撤去している(図3-13)。

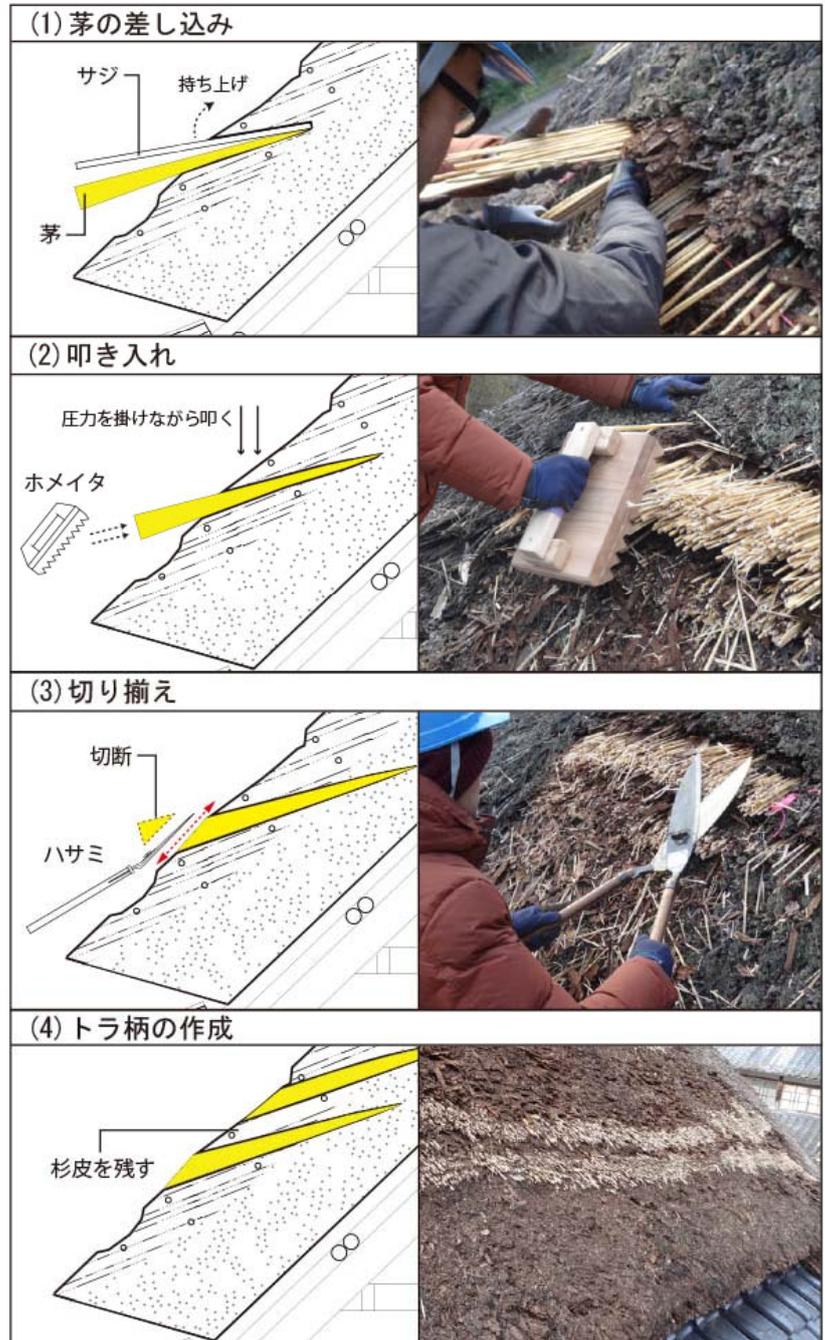


図3-10 トラ葺き差し茅の工程



図3-11 差し杉皮の工程

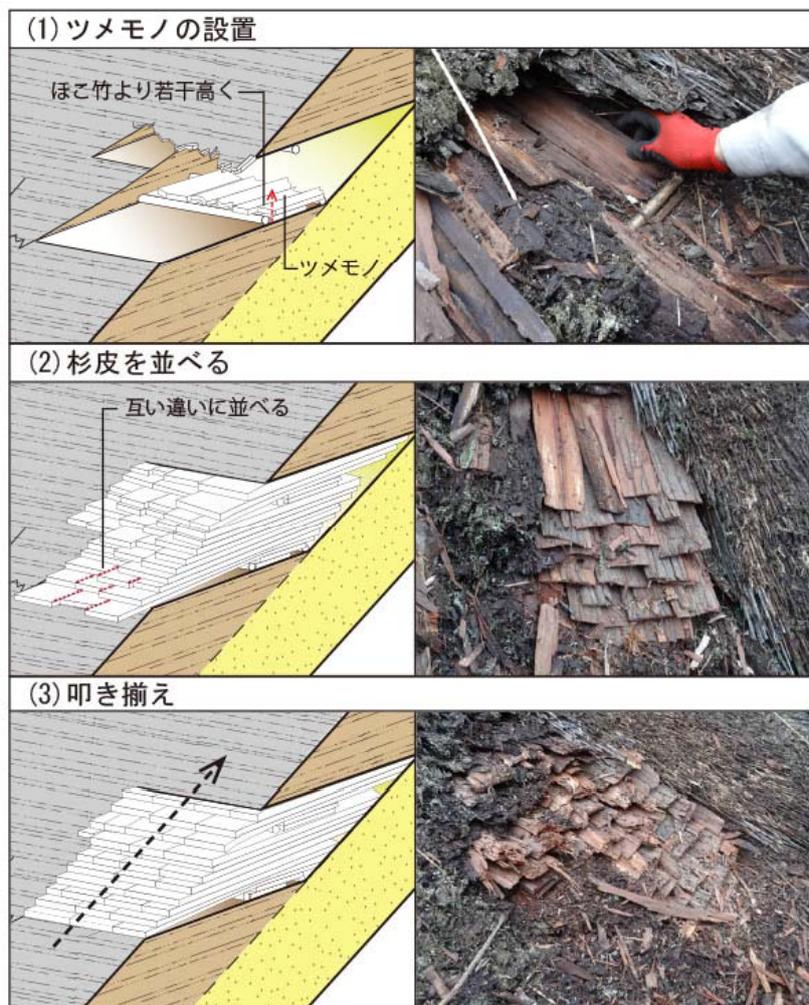


図3-12 穴塞ぎの工程

4. 茅葺き体験ワークショップ

4.1 ワークショップの企画と準備

補修方法が決まり、幾度かの試行によって工事の目処が立った段階で、住民や一般市民が参加する「茅葺き体験ワークショップ」を企画した。これは、茅葺きについて関心をもらって、保全の取り組みに共感を得ることを期待してのことである。

ワークショップでは、一般的な「差し茅」に工程が近く、並んで同じ作業のできる「トラ葺き差し茅」を行うことにした。学生が中心になって企画を検討し、フライヤーの作成、地域住民への連絡、当日の茅葺き作業の計画、慰労懇親会の準備などの役割分担を決めて進めた。また、写真や動画の記録、参加者へのインタビューを行うことにし、その担当も決めた。

期日は、工事の進み具合と地域行事の日程等を考慮して2018年1月7日とした。

4.2 ワークショップの実施

ワークショップには、40名が参加した。図4-3に示すように、大学関係者、集落住民のほか一般からも13名の参加があった。さらに、プロジェクトを通じての協力者である奥日田美建の技術者2名、阿蘇茅葺工房の技術者2名にも参加してもらった。

作業は、地上での「茅束づくり」と足場に登っての「差し茅」の2種類である。まず、スタッフがプロジェクトの趣旨と当日の作業内容や注意事項について説明した後に、茅葺きの体験に入った。

「茅束づくり」は、茅を適切な長さ(約60cm)で切断し、茅の元末を揃えて差し茅に使いやすい分量でまとめ紐で縛るといったもので、前庭を使って行なった。その際、初心者でも分量が揃うように、パイプをゲージとして使った(図4-2)。

「差し茅」は足場の上で行われるため、グループを作った上でヘルメットを渡し、足場上へと誘導した。まず、スタッフが実演を行いながら説明した。作業は①修理箇所の選定②差し込み③叩き入れの段階を踏むが、トラ葺きのラインが揃うように①はスタッフが先行。そのうえで参加者には②と③の工程を体験してもらった(図4-1)。差し茅は、休憩を挟んで2時間ほどにわたって行われ、希望者全員が体験した(図4-4)。

作業終了後に、内ヶ原公民館で慰労を兼ねた懇親会を開催した。そこでは、三苫氏に茅葺きに関する講話をしていただいた。



図4-1 差し茅の作業

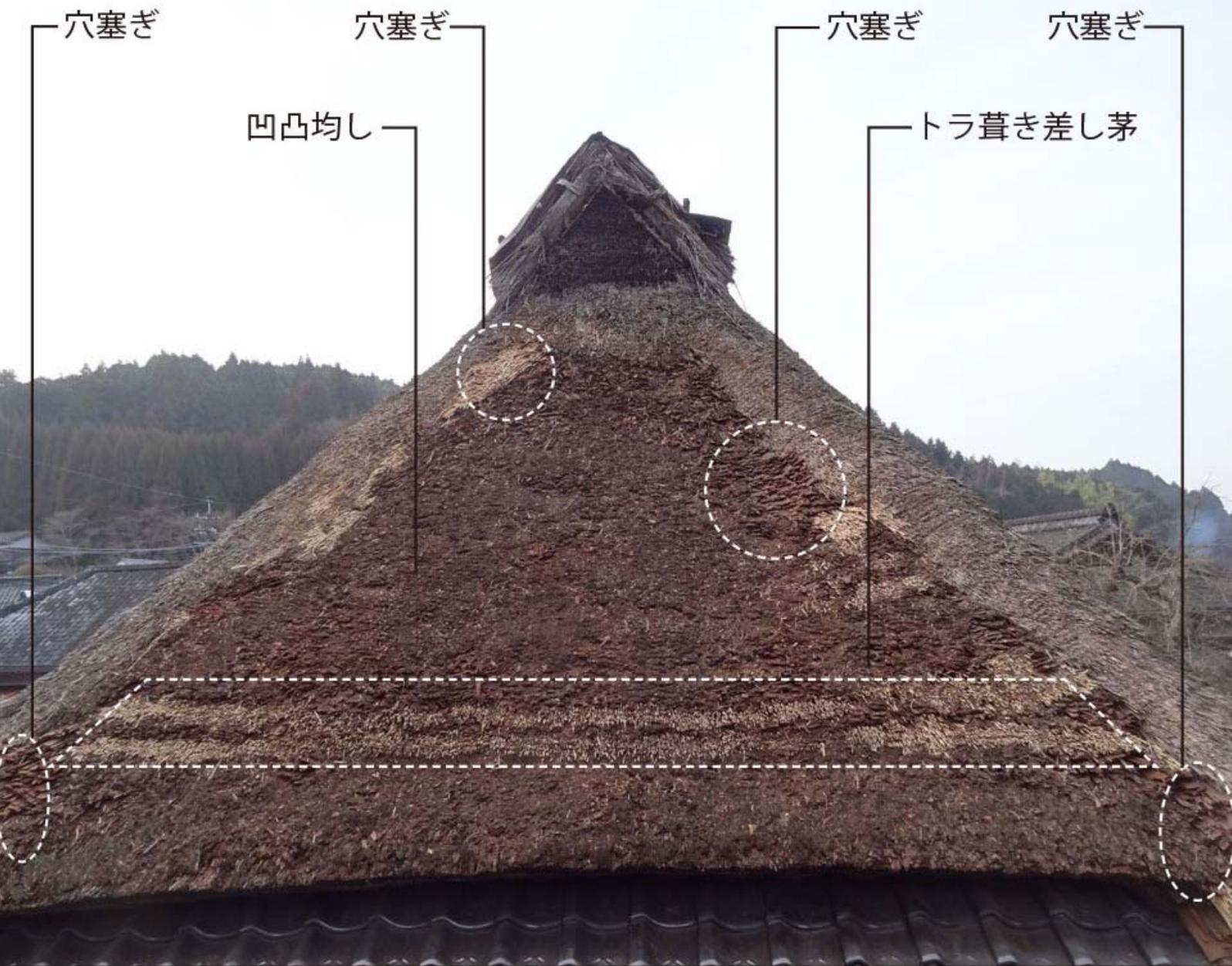


図3-13 工事完了時の東側妻面と施工箇所

4.3 参加者の感想

「小さい頃、こういう作業をさせられた。昔を思い出して懐かしい。」(80代男性)

「見ているだけではわからなかったが、解説してもらいながら、実際にやらせてもらうと、こういうことだったのかということがわかって、おもしろかった。」(40代男性)

「そもそも茅葺き屋根を見たことがないので、子供達が触れて補修までやるというのは、なかなかできない。冬休みのいい思い出になったと思う。」(30代父親)

「楽しかった。茅葺きを知っていても、どんな風にするかとかは考えたことがなかったので、新鮮だった。」(30代女性)

一方、集落居住者からは、「集落の人はあまり興味がな
いかもしれない。もっと参加するかと思ったが、寒か
ったから参加者が少なかったのだろう。もう少し天気
が良ければ、この地区に多い老人も集まったかもし
れない。」

また、茅葺き職人からは、「参加者の中に、将来こう
いう茅葺きの家に移り住んでみたいというような人が
いたらと思う。やはり、こういう日本の建築文化ある
いは生活文化を残していつてもらいたい。」という希
望が示された。



図6-1 工事完了時の東側妻面



図4-2 茅束作りの作業

| 分類 | 人数 | 性別 | 人数 |
|-----------------|-----------|----|----|
| 地域住民 | 8 | 男 | 28 |
| 一般参加者 (うち子供) | 13 (2) | 女 | 12 |
| 大学関係者 | 9 | 計 | 40 |
| 茅葺職人 | 4 | | |
| スタッフ | 6 | | |
| 計 | 40 | | |

図4-3 ワークショップ参加者の内訳

5. 茅場再生プロジェクト

5.1 茅育成の情報収集

茅葺き補修プロジェクトが一段落した2月からは、茅場再生プロジェクトに着手した。まず、文献で茅に関する基本情報を確認した後、阿蘇で茅場づくりを実践している瀬井純雄氏（阿蘇花野協会）にヒアリングを行なった。

茅（主にススキ）は根によって越冬する多年生植物で、植物遷移における草原の最終形態である。したがって、茅場の多くは長年にわたって維持されるものであり、新たに植付けるようなことはあまりないという。阿蘇も植物遷移が進みススキの草原となった場所で、例年、草刈り、野焼きを行い維持管理され、茅の植付けはほとんど行われていない。

阿蘇花野協会は、阿蘇の草原の再生に取り組んでいる団体で、管理されず荒地となった土地の樹木・雑草を除去し、草刈り・野焼きなどの営みを復活させている。数年それを繰り返すとススキが増殖し、次第に草原となっていく。そのススキの活用法として茅葺き屋根に使うことが検討され、阿蘇茅葺き

工場の植田氏らと連携して、草原再生のプロセスに茅材の生産が組み込まれるようになった。

われわれのプロジェクトでは植付けによる茅場育成を行うことにしたが、瀬井氏によれば、茅の植付けには、穂からとった種をポット・鉢で育て敷地に植える方法と、自生している茅の株分けをして移植する方法とがあるという。時期については、移植の場合には茅の生育が止む冬場に行うのがよいということだった。また、野焼きをすることは難しく危険を伴うため、刈り取りのみによる維持管理を勧められた。

5.2 敷地の選定

敷地とした分田棚田は、川に迫る急斜面に築かれているため、細長い田が急勾配に雛壇状に並んでいる。その最上部の棚田が、機械が入らず、数年来、耕作放棄地となってしまうていた。所有者の了解が得られたので、その土地を借りて茅の育成を行うことになった。

棚田の耕作放棄地には樹木が植えられているものもあるが、景観を損なうことにつながって好ましくないとされる。それに比べ、茅はあまりダメージにはならない。とくに今回の敷地は連続する棚田群の最上部で樹林との境にあり、ここが茅畑となることは景観上も悪くなく、さらに、この地区の茅葺き民家保全活動へのメッセージにもなる。

5.3 現場作業

茅場探し（2018年4月～5月）：地域関係者に茅場についてヒアリングを行なった後、それにもとづいて新川田籠地区内の茅の生息地を探してまわった。すると、棚田の耕作放棄地山間部の道沿いに所々ススキが確認された。さらに、山側のスーパー林道を入った先に数力所、ススキの群生地を発見した。それらは2～3mの高さがあり、屋根材として使用できる可能性が高い（図5-1）。ただ、各集落からのアクセスが悪く、管理もされていない状況で、茅場としての条件はあまり良くない。

また、杉の幼木と混じってススキが生えている場所もあり、植物遷移の状況が視覚的に確認された（図5-2）。ただし、それらは丈が低く屋根材には適さない。

敷地の整備（2018年5月～）：ススキの生育には、ある程度、乾燥した土壌のほうが良いとされ、阿蘇の火山土壌は水ハケがよく、適している。今回は旧棚田を使うため、水ハケが良くないことが予想されるが、最上部に位置し、数年にわたって稲作で水が張られることはなかったため、そのままの土壌を使うことにした。

5月後半に、敷地の草刈りを行なった（図5-3）。その周辺の雑草が生い茂った部分も合わせて刈り、景観を回復させた。その際、自生しているススキも確認されたが、疎らに生えている状況で、茎も伸びておらず、使えるようなものではなかった。

株分け・植付け（2018年11月～）：新川田籠地区内で確認されたススキの生息地の中から、屋根材に適した場所を選び、ススキの移植を行う。時期はススキの成長が止まる冬場がよいとされていることから、11月以降に開始する。準備や試行を重ねた後、参加型の体験ワークショップを開催する予定である。



図5-1 2mほどのススキの群生地



図5-2 杉の幼木とススキ



図5-3 敷地での草刈り作業

6. 今後に向けて

6.1 技術的な課題

今回のプロジェクトの目的は、まず、われわれ素人に何がどこまでできるかを試すことであった。しかし、結局のところ専門家の支援なしにはまったく事業が進まなかった。とくに茅葺きの実践においては、単なる知識習得だけでなく、直接に実地指導を受けることが必須である。

一方で、未経験者でも指導を受ければ一定の技術の習得が可能であり、実際の工事において戦力になりうることもわかった。素人が中心になって補修施工された屋根は、9ヶ月を過ぎた現段階でも、比較的良好的な状態を保っている。ちなみに、専門技術者に現地指導を受けた時間は、合計で4.5時間であった。

もっとも、今回の工事は本来の葺き替えではなく部分的な補修であり、採用した工法も作業量も限定的である。本格的な葺き替えには高度な技術が伴うことから、今回以上に専門技術者の協力が必要となろう。今回は専門家の支援がボランティア・ベースで行われたが、一般には経費として見込むべきものである。また、葺き替え工事には労働力も相当に必要で、はるかに多い人員と日数を確保しなければならない。今回は小規模な工事だったが、それでも作業量は決して少なくなかった。本格的な葺き替えに向けては、人材確保を含めた体制づくりも課題となる。

また、事前準備、なかでも物件調査の重要性が再確認された。工事に入る前の作業がかなり多かった。特に老朽具合の把握が甘く、工事直前になってどのような方法を採用するかを再考を迫られた。補修は工法の選択に幅があり、それは建物の特性や傷み具合に左右される。このような取り組みでは、事前の詳しい調査にもとづく検討が欠かせない。

6.2 茅葺き保全への意識

プロジェクトのもう1つの目的は、茅葺き民家の保全活動への理解を共有し広めることであった。参加型ワークショップを行なった意図もそこにある。ワークショップでの作業は僅かなものであったが、予想以上に参加者の理解と共感が得られた。都市住民の茅葺き民家に対する評価は高く、その保全についても取り組みによって意識を誘発できる可能性は十分にある。その際に、今回のような体験を取り入れることは有効であろう。

また、茅葺き職人は、茅葺き民家およびその技術の持続に強い関心をもって仕事に取り組んでおり、このプロジェクトにも賛同と期待を示してくれた。ボランティアに協力してくれたのも、茅葺きが失われる危機感がもたれている。

一方で、プロジェクトを通じて、地域住民の茅葺き民家に対する評価は、都市住民ほどには高くないように感じられた。地域住民、特に高齢者にとって茅葺き民家はそれまで普通にあったものであり、特別な存在ではない。そして、経験的にマイナスの側面もよく知っており、ワークショップでその認識が大きく変わるわけではない。茅葺き民家の価値やそれを保全する意義については、都市住民の感覚の押し付けにならない説明が必要だろう。

6.3 プロジェクトの今後

今回の対象物件である「内ヶ原の家」は、存続が危ぶまれる状況にある。現時点で所有者は解体の意向を示しており、その第一の理由は「この負の遺産を子供の代に残したくない」というものである。プロジェクトメンバーで、資産的な対応も含め、残して活用する方策を検討しているが、妙案が見出せているわけではない。

もうひとつの取り組みである茅場再生については、現在まさに進行中である。いずれにせよ、今後もこの茅葺きのプロジェクトを試行錯誤しながら続けていきたいと考えている。

現在は、同様の茅葺きに関する取り組みが全国で取り組まれている注6)。そのうちのひとつ、岡部明子氏が取り組む「ゴンジロウ プロジェクト」に菊地氏が参加した経験があり、それが今回の取り組みに大いに参考になった。茅葺き保全は難易度の高い課題であり、同様の取り組みを行う人々と問題を共有し、連携していくことが有効であると思われる。そのような情報やアイデアを共有するネットワークが形成されることを期待する。

謝辞 本プロジェクトに遂行にあたっては、「内ヶ原の家」所有者、内ヶ原集落の住民の方々に大いなるご理解とご協力をいただいた。また、茅葺き職人の方々には、技術や資材の提供を惜しみなくしていただいた。心より感謝申し上げる次第である。

<研究主査>

・菊地 成朋
九州大学大学院 教授・工学博士

<研究委員>

・牛島 朗
山口大学 助教・工学博士
・天満 類子
広島工業大学 助教・人間環境学博士
・赤田 心太
九州大学大学院 博士後期過程

<研究協力者>

・齋藤雅弘
九州大学大学院生：当時
・丸山千尋
九州大学大学院生：当時
・永田 航
九州大学大学院生
・三浪秀公
九州大学大学院生
・佐藤利昭
九州大学大学院准教授
・南部恭広
九州大学大学院助教
・窪寺弘顕
九州大学技術専門職員

* 当実践研究報告普及版は『住総研 研究論文集・実践研究報告集』No.45の抜粋版です。参考文献は報告集本書をご覧ください。